

ブラインドサッカーおよびロービジョンフットサルの基礎知識

NPO 法人日本ブラインドサッカー協会

2022 年国際公式試合より、主に以下の点においてルールが改正となりました。

	<変更前>	<変更後>
試合時間	20 分ハーフプレーイングタイム	→ 15 分ハーフプレーイングタイム
ピッチサイズ	縦 40m×横 20m	→ 縦 38~42m×横 20m
第2PK	チームで累積されるファウルが 6 つ目から	→ チームで累積されるファウルが 5 つ目から

競技は2種類

フットサル(5人制のミニサッカー)を基にルールが考案されており、障がいの程度によって2つのカテゴリーに分かれています。

ブラインドサッカー ⇒ ゴールキーパー以外は全盲の選手がプレーします。視覚障がい者スポーツのクラス分けの用語を用いて、B1クラスと呼ばれることもあります。

ロービジョンフットサル ⇒ 弱視の選手が主にプレーします。視覚障がい者スポーツのクラス分けの用語から B2/B3クラスと呼ばれることもあります。

視覚障がい者スポーツにおいては、「見えにくい状態」を3つのカテゴリーに分けています。

B1 : 視力が LogMar2.60 (0.0025)より低い

B2 : 矯正後の診断で、視力 0.03 まで、ないし、視野5度まで

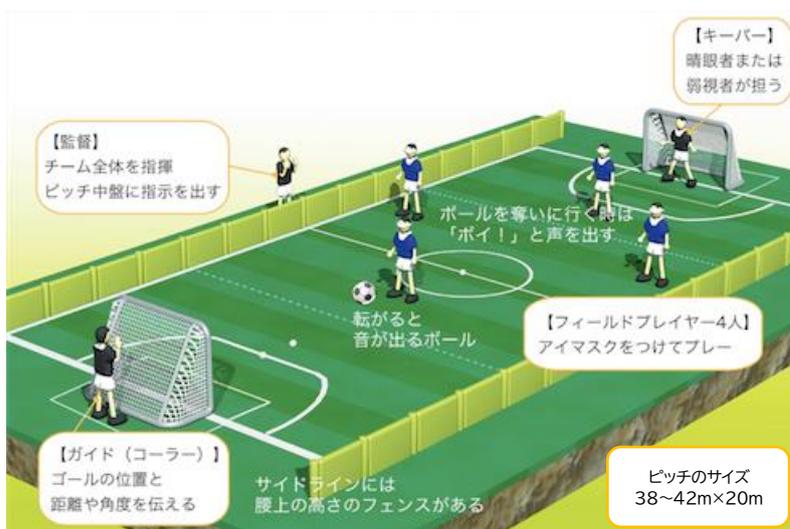
B3 : 矯正後の診断で、視力 0.1 まで、ないし、視野20度まで

※国際大会では開幕直前に視力の検査を行い、当該選手のみがプレーすることができます。国内大会では、普及を目的に健常者もピッチ上の人数を制限して、視覚障がい者とともプレーできるようにしています。

ブラインドサッカー（全盲選手・B1クラス）

ブラインドサッカーは、通常、情報の8割を得ているという視覚を閉じた状態でプレーします。技術だけではなく、視覚障がい者と健常者が力を合わせてプレーするため、「音」と「声」のコミュニケーションが重要です。

ブラインドサッカーでは、アイマスクを着用した4人のフィールドプレイヤー(FP)と、晴眼者もしくは弱視者が務めるゴールキーパー(GK)がいるほか、相手チームのゴール裏にガイド、自陣サイドフェンス外側(範囲に制限あり)に監督がいます。



特別なルール

フットサルのルールが基となっていますが、いくつかブラインドサッカー独特のルールがあります。

<音の出るボール>

ボールは、フットサルボールと同じ大きさです。ボールは転がると音が出る特別なボールを使用します。その音で全盲の選手たちもボールの位置や転がりがわかります。

<「ボイ！」>

フィールドプレーヤーはボールを持った相手に向かって行く時に、「ボイ！」と声を出さなければなりません。選手の存在を知らせ、危険な衝突を避けるためのルールです。発しないとノースピーキングというファウルを取られます。「ボイ(Voy)」とはスペイン語で「行く」という意味です。

<目の見える人の協力>

敵陣ゴールの裏に、「ガイド」と呼ばれる役割の人が立ちます。攻めている場面でゴールの位置と距離、角度、シュートのタイミングなどを声で伝えます。

GKは晴眼者または弱視者が務め、自陣での守りについて選手に声で指示を出します。GKは 5.82m × 2m のエリア内でしか動くことができません。エリア外にあるボールに触ることも反則です。

また、サイドフェンスの外側に立つ監督は、選手交代の決定などに加えて、ピッチ中盤でのプレーに声を出します。選手同士の声の掛け合いも含めたコミュニケーションが勝負のカギを握ります。

<サイドフェンス>

ピッチは、フットサルコートとほぼ同じ広さです。両サイドライン上に1mから1.2mの高さのフェンスが並びます。ボールがサイドラインを割らないことや、選手がピッチの大きさや向きを把握することも助けます。フェンスの跳ね返りを使ったパスも頻繁に見られます。

<ヘッドギアの着用>

選手同士で衝突したり、転倒したりしたときの頭部の外傷を予防するために、保護用のヘッドギアを装着することができます(国内大会では装着が義務づけられています)。

<PK と第2PK>

ペナルティーエリア内での反則には、相手チームにPKが与えられます。ゴールから6mの位置から蹴ります。もう一つ、各ピリオドでチームに累積されるファウルが5つ目から、第2PKが相手チームに与えられます。

<試合時間>

第1ピリオド、第2ピリオドとも15分(プレーイングタイム)で行われます。

※国内大会では、それぞれの大会要項に従い、競技時間を変更する場合があります。

ロービジョンフットサル (弱視選手・B2/B3クラス)

ロービジョンフットサルはアイマスクを装着しません。弱視者が弱視状態のまま、フットサルとほぼ変わらないルールでプレーします。ボールも音源がない通常のフットサルボールを用います。一般的に「目が悪い」といって、視力が弱い状態を想像します。しかし、見えにくさはいろいろあり、下図のように、ぼやけ、欠け、にごりなどの症状があり、さらにそれらが掛け合わされて多様な見えにくさを生んでいます。見えにくい状態を一般的には「弱視」と言います。ただし、弱視は医学的な専門用語の側面があり、幅広い意味で見えにくい状態にあることを「ロービジョン」と呼んでいます。障がいによって見え方の異なる選手同士がお互いを理解してプレーすることは難しいですが、反面、うまくいった時の喜びも大きいと選手たちは口にします。



つうじょうの見え方

ぼやけた見え方

視野が欠けた見え方

黄色くにごった見え方

競技の沿革

ブラインドサッカーは1980年代初頭にルールが統合され、ヨーロッパ、南米を中心に広くプレーされてきました。世界では、1990年に初めてヨーロッパで大会が開催され、その後、ヨーロッパ、南米を中心に大会が整備されました。日本では、2001年に現在プレーされているIBSA(International Blind Sports Federation:国際視覚障害者スポーツ連盟)の国際ルールが上陸しました。

2001年11月11日に日本ブラインドサッカー協会(JBFA)の前身となる「音で蹴るもうひとつのワールドカップ実行委員会」の発足式が大阪にて行われました。その後、急速に全国に普及し、2003年3月9日、東京・多摩にて初めての全国大会である第1回日本視覚障害者サッカー選手権大会が実施されました。以降、毎年行われる日本選手権をはじめとして、各地で盛んに試合が行われています。

ブラインドサッカーの世界選手権は1998年にブラジルで初めて開催されました。98年、00年、02年までは2年ごとに開催されましたが、2004年のパラリンピックアテネ大会から正式競技になると、以後は4年周期の大会となっています。日本は2006年の第4回大会(アルゼンチン)で初出場を遂げ、2010年の第5回大会(イングランド)にも出場しました。2014年の第6回大会は、東京の国立代々木競技場フットサルコートで行い、多くの観客やメディアの注目を集める中、日本は史上最高の6位という成績を収めました。

パラリンピックでは2004年にアテネ大会で初めて行われて以来、4大会連続でブラジルが金メダルを獲得しています。日本代表は2020年の東京大会で初出場し、5位の成績を収めました。

弱視クラスの世界選手権が初めて開催されたのは1998年、ブラジル・カンピーナスにおいてです。その後、2002年にイタリア・ヴァレーゼ、2004年にイングランド・マンチェスターにて開催された後は、しばらく開催されていませんでした。2013年に宮城県で開催された日本大会が9年ぶりの世界選手権となりました。また、IBSA World Gamesという視覚障がい者スポーツの国際総合大会も4年に1度開催されています。ブラインドサッカー及びロービジョンフットサルは2007年サン・カエタノ・ド・スル(ブラジル)、2011年アンタルヤ(トルコ)で実施され、2015年はソウル(韓国)で行われました。

競技の広がり

日本では競技人口が晴眼者を含め、約400人といわれています。国内のチームは、ブラインドサッカーで30チーム前後あり、ブラインドサッカーは北日本、東日本、中日本、西日本の4地域でリーグ戦を、ロービジョンフットサルは東日本リーグを開催しています。また、ブラインドサッカー体験会など視覚障がい者理解の啓発を行っています。サッカー界にも協力者が多く、当協会釜本美佐子前代表理事の弟の釜本邦茂氏をはじめ、北澤豪氏、中西哲生氏、山口素弘氏、名波浩氏らにもイベント等で普及活動に力を貸していただきました。ブラインドサッカーを体験することは、コミュニケーションを学ぶことにつながります。それを活かした企業研修「OFF TIME Biz」や、一般向けの啓蒙活動「OFF TIME」、学校での体験授業「スポ育」といった活動の機会も増え続けています。また、ブラサカキッズキャンプなど視覚障がい児にスポーツの機会を与える活動も2013年より始め、ブラサカ・キッズトレーニング、ブラサカ・スポーツ探検隊と活動が広がっています。